子供のためのシェイクスピア劇上演：山崎清助の『リチャード二世』

深堀　悦子

2001年夏、「子供のためのシェイクスピア」シリーズの第６作目となる『リチャード二世』*(King Richard II)*が、山崎清介による演出・出演で上演された。[1] 山崎はこの公演の4年前の1997年秋に初めて小田島雄志訳の『リチャード二世』を読み、リチャードの「まるでイカが一瞬のうちに体色を変化させるように、王としての面をころころ変えながら、落ちてゆく様」を大変面白く感じ、日本ではほとんど知られていないこの作品をぜひ舞台化したいと思ったと言う。（筆者との面接インタヴュー）[2] しかしながら、当時、『リア王』の上演を終えたばかりであった彼は、王の没落という点で類似しているこの作品を翌年に上演するのはあえて避け、歴史的にはリチャード２世に続くヘンリー４世について書かれた『ヘンリー四世・第１部』と『ヘンリー四世・第２部』を一本にまとめ、『ヘンリー四世』として上演した後で、『リチャード二世』を舞台化することにしたとのことだ。この結果、1998年の『ヘンリー四世』で、まず、反乱軍と放蕩息子ハルに悩まされるヘンリー4世とハルの理想的君主への成長の軌跡が示された後、2001年の『リチャード二世』において、ヘンリー４世の不安定な治世の原因となったリチャード廃位の経緯が、遡って説明されることになった。

山崎も指摘している通り、今世紀に入るまで『リチャード二世』は、日本では概して周知度の低いシェイクスピアの歴史劇の中でも、特に上演回数の少ない作品の一つであった。記録されている限りでは、20世紀におけるこの戯曲の上演は、本邦初演となった1979年の小田島雄志訳・出口典雄演出、劇団シェイクスピア・シアターによる小劇場での公演と、1994年の福田恒存訳・村田元史演出、劇団昴による公演だけである。一方、英語による上演については、初来日公演となった1988年のマイケル・ボグダノフ (Michael Bogdanov) 演出、マイケル・ペニントン(Michael Pennington) がリチャード２世を演じたイングリッ

---

1 「子供のためのシェイクスピアシリーズ」は、1995年、夏休みに親子で楽しめる企画として旧東京グローブ座でスタートし、以来、毎年シェイクスピア作品を上演している。2000年からはパナソニックがメセナ活動の一環として全国公演を支援。2010年までに上演した作品は、『ロミオとジュリエット』、『十二夜』、『リア王』、『ヘンリー四世』（『第１部』と『第2部』をまとめたもの）、『オセロー』、『リア王』、『リチャード二世』、『ヴェニスの商人』、『シンベリン』、『ハムレット』、『尺には尺を』、『リチャード三世』、『夏の夜の夢』、『マクベス』、『お気に召すまま』であり、2011年には『冬物語』を上演予定。

2 山崎清介監督とのインタヴューは2001年８月21日、倉敷市芸文館ホールでの『リチャード二世』公演終了後、行われた。山崎氏に謝意を表したい。

シュ・シェイクスピア・カンパニーによる東京グローブ座での公演のみである。(『シェイクスピア研究資料集成』) したがって、21世紀初頭を飾った山崎による『リチャード二世』の上演の意義は、何よりもまず、シェイクスピアは歴史劇も面白いということを観客に実感させようと試みた点にあると言ってよいだろう。それでは、そのために山崎が取った方法とは何か。今から、この公演を振り返り、「子供のため」の視点にも注目しながら、彼のこの作品に対するコンセプトや演出の意図を検証してゆきたい。

ちなみに、子供のためのシェイクスピア・シリーズは、シェイクスピアは難しいと思っている人々にとって分かりやすく親しみやすい芝居作りを目標に、子供から大人まで幅広い観客の支持を集めてきた。「話の筋をしっかりと見せれば子供たちにも必ずわかる」という信念のもと、山崎はシェイクスピア戯曲を大木に喩え、物語のプロットに相当する樹形をはっきりと見せるために、台詞と登場人物にそれぞれ相当する葉と小枝を刈り込んでゆく作業を入念に行う。(『尺には尺を』プログラム　25) その結果、今回の公演では小田島訳のおよそ5分の 2 がカットされ、上演時間は 1 時間40分となった。インターヴァルは設けられなかった。出演者は 9 名。主役のリチャード 2 世を吉田鋼太郎、彼の従兄弟のヘンリー・ボリングブルック(Henry Bolingbroke) を『ヘンリー四世』でも同役を演じた小須田康人、ボリングブルックの父親のジョン・オブ・ゴーント (John of Gaunt) を彩乃木崇之が演じた。吉田を除く俳優たちは複数の登場人物を兼ねた。なお、ロス卿、ウィロビー卿、ウェストミンスター修道院長、サリー公、バークリー卿、フィッツウォーター卿、式部官、そしてリチャードの 3 人の寵臣のうちグリーンが削除された。(『グローブ座カンパニー・リチャード二世』プログラム) 基本的に、椅子と机だけの簡素な舞台装置による上演だった。

2001年公演では、まず、子供のためのシェイクスピア・シリーズの定番である黒い帽子と黒いコートをまとった出演者 (以下、黒コートと略す) 全員が手拍子を打ちながら舞台に登場し、『ヘンリー四世・第 2 部』のプロローグで「噂」(Rumor) の語る台詞が、黒コートたちのコロスによって語られた。ただし、『リチャード二世』のプロットと関係のないシュルーズベリーの戦いにおける反乱軍勝利の虚報に関するせりふは削除された。

さあ、耳を開いて聞きな、それがし、「噂」が大声で
しゃべろうってんだ、耳に蓋をするわけにはいくまい？
日の昇る東のかたより日の沈む西の果てまで、
風を馬車に仕立てて乗りまわし、この土地に起こる
あらゆる出来事を伝えひろめるのがおれの役目だ。
悪口、デマをひっきりなしにこの舌先にのせ、しゃべりまくり、

諸君の耳に偽情報を詰めこむのがおれの商売だ。[3]

山崎はこのように幕開きにおいて、黒コートたちを「噂」として登場させることにより、「噂が国中に飛び火して国民の中に巣食ってゆくというイメージ」（筆者との面接インタヴュー）とともに、噂の影響力と今後展開する王位簒奪劇との関連性についてのヒントを、観客に提示したようである。黒コートたちが、「伝令たちが息せききってやってくるが、/ もってきた知らせはすべておれから仕入れたネタだ。 / やつらが届けるのは「噂」の舌から出た情報だってことは、/ 真実の悪い知らせよりもっとたちの悪い嘘のいい知らせだってことだ。」[4] という台詞に続いて、「ヘンリー・ボリングブルック！」、そして「 モーブレー！」と呼ぶと、彼らの中から黒コートを脱ぎ捨て、ボリングブルックとモーブレーがそれぞれ現れた。二人は顔を見合わせるや否や、互いを謀反人と呼び、非難し始めた。ところで、原作の1幕１場では、リチャードがボリングブルックと、ボリングブルックによって告発されたトマス・モーブレー (Thomas Mowbray) を宮廷に呼び出し、二人を対決させる。ボリングブルックがモーブレーを軍資金着服に加え、リチャードの叔父グロスター公爵殺害の罪で糾弾し始めると、モーブレーは讒言であると反論し、両者は激しく言い争うため、事の決着を後日、決闘によって図ることになる。この後、グロスター公爵夫人 (Duchess of Gloucester) が亡き夫の復讐をゴーントに訴える１幕２場を挟んで、１幕３場では手順どおりに儀式が進む中、リチャードは決闘を突如中止させ、モーブレーに永久追放を、ボリングブルックには初め10年間の国外追放を言い渡すものの、嘆き悲しむゴーントを見て追放期間を６年に変更するのだが、山崎は以上の３場面を下記のように一つにまとめることによって、明快でスピード感のある筋の展開を試みた。

ボリングブルックのモーブレーに対する糾弾が、グロスター公爵の殺害に及ぶと、グロスター公爵夫人（山崎の操るシェイクスピア人形）が登場し、ボリングブルックにこう訴えたのだ。[5]「私の夫、私の命、私のグロスターを返して。あの人の血は私に向かって、正

---

[3] "Open your ears; for which of you will stop / The vent of hearing when loud Rumour speaks? / I from the orient to the drooping west, / Making the wind my post-horse, still unfold / The acts commencèd on this ball of earth. / Upon my tongues continual slanders ride, / The which in every language I pronounce, / Stuffing the ears of men with false reports." (Induction. 1-8) *Henry IV, Part 2* からの引用はすべてWeis 編、The Oxford Shakespeareによる。

[4] "The posts come tiring on, / And not a man of them brings other news / Than they have learnt of me. From Rumor's tongues / They bring smooth comforts false, worse than true wrongs." (Induction. 37-40)

[5] 山崎は人形を使ってソールズベリー伯、庭師、エクストンも演じた。彼が人形を動かし、腹話術で台詞をしゃべるのである。この人形の顔は、子供のためのシェイクスピアシリーズのちらし等に掲載されているシェイクスピアの似顔絵に似せたものになっている。

義の裁きを求めて叫んでいます。」[6]「どうか無実の罪に泣く夫の恨みが、虐殺者モーブレーの胸板を刺し連ねてくれますように。」[7]この直後に彼女は死ぬのだが、彼女の死の瞬間は俳優たちの「シュッ」という「擬音の手渡し」（長谷部）によって表現された。すなわち、彼女が上記の言葉に続いて、「アッー！」という断末魔の声を上げると、傍らのボリングブルックや黒コートたちが、「叔母様、しっかり！」と数回叫んだ後、順番に「シュッ」という音を繰り返したのだ。あたかも人間の息あるいは魂が天に昇ってゆくかのような印象を与えるこの擬態音の連続は、子供のためのシェイクスピア・シリーズにおいて登場人物の死を表すのにしばしば用いられるユニークな手法である。さて、原作とは異なり、この後、初めてゴーントが登場し、彼の面前でボリングブルックとモーブレーが決闘を始めた。原作では決闘は中止され、剣を交える機会が与えられない両者を実際に戦わせることで、山崎は、口論だけでは子供たちにわかりにくいと思われる二人の敵対する立場を、視覚的に示そうとしたと考えられる。そこへリチャード王が登場。最初彼は二人に対し穏やかな口調で、決闘をやめるよう繰り返し告げるが、完全に無視されたため、ついに苛立ったように声を張り上げて二人を制止した。ところで、ボリングブルックに対する10年間の国外追放の宣告は、リチャードがまず、「５足す５は？」と、ゴーントや廷臣たちに問いかけて、ゴーントから10という答を聞き出し、次に、その答で本当によいかどうか、ボリングブルックやモーブレーや客席にまでに目配せで確認するというプロセスを踏んでから、やっと言い渡された。この間のリチャードの真面目腐った表情が、観客の笑いを誘った。吉田綱太郎演じるリチャード王のこのような「稚気にあふれた演技」（長谷部）は、彼がモーブレーに永久追放を宣告する場面においても見られた。リチャードは、「「二度とわが国にもどるな」という絶望のことばをお前に申し渡す、これにそむけば」という言葉の後、続けて言うつもりだった「いのちはないと思え。」[8] という決まり文句を、モーブレーに言われてしまったのだ。「僕に言わせろ！」と言って、駄々をこねる子供のように地団太踏んで悔しがるリチャードの馬鹿馬鹿しい程滑稽な演技が印象的だった。しかし、次の場面（１幕４場）で、ゴーント重態の報を受けたリチャードが、彼の一刻も早い死を神に祈る時、観客の顔から笑いは消え去ってしまったのである。

２幕１場から、死の床に伏すゴーントが、国家の将来を憂いで弟のヨーク公爵（Duke

---

6 "But Thomas, my dear lord, my life, my Gloucester, / One vial full of Edward's sacred blood,/ One flourishing branch of his most royal root, / Is cracked, and all the precious liquor spilt, / Is hacked down, and his summer leaves all faded / By Envy's hand and Murder's bloody axe." (1.2.16-21); "The best way is to venge my Gloucester's death." (2. 1. 36) *Richard II* からの引用はすべてForker 編、The Arden Shakespeareによる。

7 "O, sit my husband's wrongs on Hereford's spear, / That it may enter butcher Mowbray's breast!" (1. 2. 47-48)

8 "The hopeless word of 'never to return' / Breathe I against thee, upon pain of life." (1. 3. 152-53)

of York）に語る台詞はすべて削除され、訪ねて来たリチャードに最後の諫言を試みるゴーントと、それに対し不快の念を露にするリチャードのやり取りに焦点が置かれた。リチャードの愛情のかけらも感じさせない「病魔相手に細身の剣で戦っておいでか、老ゴーント？」という見舞いの言葉に対して、ゴーントは国を守ってきた心労と息子を追放された悲しみでまさにおっしゃる通り、やせ細ってしまったと語り、「墓穴にむかうゴーントは墓穴同様に身も細りました、たたけばなかの骨が空洞にゴーンとひびくでしょう。」と駄洒落で返した。原作ではこれを受けてリチャードは「病気の身でよく自分の名をしゃれのめすことがおできだな。」[9] と言うのだが、吉田演じるリチャードはこの言葉の替わりに、「寒くはないのですか？」とゴーントに聞いたのだ。「寒い駄洒落」という意味のこの突っ込みの言葉に、この場の冷たい空気を読み取っていた観客からも、思わず笑いが起こった。ゴーントが死ぬと、リチャードはその薄情で冷徹な側面をますます露呈させてゆく。彼はヨーク公の諫めを無視して、アイルランド遠征の軍事費に充てるためゴーントの財産を没収してしまうのである。一方、ノーサンバランド伯 (Earl of Northumberland) らはイングランドにまもなく上陸予定のボリンブルック軍に加わることを誓い合う。

2 幕 2 場では王をアイルランドに送り出したイザベラ王妃のもとに、大軍を率いてボリングブルックが帰国したという知らせが届く。そして場所はグロスターシャーに移り、ボリンブルックが王の留守中を預かるヨーク公と会見し、ヨーク公は彼の挙兵を叱責するが、その目的が亡父の身分を回復することであると聞かされて、一行を城に招き入れる。（2 幕 3 場）ところで、リチャードのイングランドへの帰還は遅れ、彼のために招集されたウェールズ軍は、リチャード王崩御の噂を信じて解散してしまうことになるが（2 幕 4 場)、2001 年公演で、ウェールズ軍の解散をソールズベリー伯爵（Earl of Salisbury）に告げたのは、原作のようにウェールズ軍の隊長ではなく、1998年の『ヘンリー四世』にも登場した、戸谷昌弘演じるグレンダワー（Glendower）だった。前回同様、他の俳優に肩車され、雷鳴のような効果音とともに姿を現した驚くべき長身のグレンダワーを見て、この作品と『ヘンリー四世』との関連性に気づいた観客も少なからずいたはずである。

3 幕は、1 場のリチャード王の寵臣のブッシー (Bushy) とグリーン(Green) に、ボリングブルックが死刑を宣告する場面が削除され、2 場から始まった。場所はチャード王一行がアイルランドから帰還するウェールズの海岸。この場面は、原作では王の「あれか、バークロリーの城というのは？」に対して、オーマールが「はい、陛下。荒波にもてあそばれたあとご上陸されたここの空気、いかがなものでしょう？」[10] と尋ねる台詞で始まるが、

---

[9] Richard: "What comfort, man? How is't with aged Gaunt?" (2. 1. 72); Gaunt: "Gaunt am I for the grave, gaunt as a grave, / Whose hollow womb inherits naught but bones." (2. 1. 82-83) ; Richard: "Can sick men play so nicely with their names?" (2. 1. 84)

[10] King Richard: "*Barkloughly Castle call they this at hand?*" (3. 2. 1); Aumerle: "*Yea*, my lord. How brooks your grace the air / After your late tossing on the breaking seas?" (3. 2. 2-3). 2001年公演ではイタリック体の部分は削除された。

2001年公演ではこの冒頭の台詞の前に、リチャード王らが時化の海に翻弄される場面が挿入され、観客を巻き込んだ形で演出された。まず、リチャード王、カーライル司教(Bishop of Carlisle)、オーマール(Duke of Aumerle)、複数の従者が、「荒波、荒波」と繰り返し叫びながら、観客席から登場。彼らは観客席から一人の子どもを連れて舞台に上がり、今度は「さざ波、さざ波」と繰り返し、次に「凪ぎ、凪ぎ」と言いながら、嵐が収まったことを確認した後、気がついてみると知らない子供がリチャードの隣に座っているという光景を演出した。その子供をめぐるリチャードとオーマールの即興のギャクが客席の爆笑を買った。これは、「笑いで緩急をつけ、集中力が短い子供たちを、解放させてあげて、また集中させるため」の山崎の得意とする方法の一つである。（筆者との面接インタヴュー）

この後、ウェールズ軍の解散、ブッシーらの処刑、ヨーク公とボリングブルック軍との合流を知ったリチャードは、戦意を失いフリント城に立てこもるが、ついにはボリングブルックの権利回復の要求を認め、退位までも申し出る。（3幕3場）2001年公演では、フリント城にボリングブルック一行が到着すると、城壁に見立てた高い壁の上から、王冠を頂き、黄金の衣装をまとったリチャードが上半身を覗かせた。その後、城壁が、その裏側が客席に見える位置までゆっくりと動かされると、驚いたことに観客が見たものは、ズボンを身に着けずに、城壁に立てかけた梯子に足をかけているリチャードの後姿だったのである。この滑稽で情けない「裸の王様」を見て、観客は笑った。自分に苦言を呈する者は敬遠し、都合のよいことだけを言ってくれる寵臣たちに囲まれて、現実を直視しようとせず、すべてを失ってしまうリチャードを、山崎は「裸の大様」に喩え、視覚的に子供たちにも分かる形で示そうとしたと推察される。下の庭へ降りてゆき、王冠と上着と白い下着のパンツに靴という姿で、ボリングブルックと対峙したリチャードには、諦観の境地に達したかのような超然とした雰囲気が漂っていた。彼には、ボリングブルックの要求が、追放宣言の撤回と、没収された所領の無条件返還だけに留まらないだろうことが十分わかっており、ゆえに、彼は跪くボリングブルックにこう言うのだ。「私にはわかっておる、あんたの膝は低く曲げられていても、あんたの心がこの高さ（王冠を指す）にあることは。」[11] これに対して、「陛下、私はただ私のものをいただきにきただけです。」[12] と答える「冷ややかで腹の見えない人物」（長谷部）としてのボリングブルックを、小須田が好演した。一方、ヨーク公爵の屋敷の庭園で庭師たちの話を立ち聞きした王妃は、リチャードがボリングブルックに屈したことを知り、夫に会いにロンドンへ向かう。（3幕4場）

4幕1場。場所はウェストミンスターの大会堂。原作ではこの場面は、ボリングブルッ

---

[11] "Up cousin, up. Your heart is up, I know, [*Raises Bolingbroke.*] / Thus high at least, [*Indicates crown.*] although your knee be low." (3. 3. 194-95)

[12] "My gracious lord, I come but for mine own." (3. 3. 196)

クの面前で、グロースター公暗殺への関与を否定するオーマールと彼の関与を示唆する複数の貴族たちの証言から始まるが、山崎の公演ではこの冒頭の部分を削除。その結果、ヨーク公爵が登場し、王冠をボリングブルックへ譲渡するというリチャードの意思を伝え、ボリングブルックは即座にこれを受け入れるが、カーライル司教がそれに抗議するという場面から始まった。ここで、シェイクスピアはカーライル司教に、「神の威厳をその身に体現しておられ、神の選びたもうたその副官、執事、代理人として聖油を塗られ、王冠をいただき、長年王座にあるおかたが、この場においでにならぬのに、卑しい臣下の宣言によって裁かれてもいいものでしょうか？」[13] と言わせ、王権神授説擁護の立場から異論を唱えさせているのに対し、彩乃木崇之演じるカーライル司教の言葉は、「長年王座にあるリチャードが、この場においでにならぬのに、卑しい臣下の宣言によって裁かれてもいいものでしょうか？」となっており、王権の神聖不可侵の概念を象徴する語句が、原作の台詞から削除されている。ちなみに、吉田演じるリチャード王自身でさえ、「荒海の水を傾けつくしても、神の塗りたもうた聖油を王たるこの身から洗い落とすことはできぬ、まして世のつねの人間どもの吐くことばごときで、神の選びたもうたその代理人を廃位させることはできぬ。」[14] とは言わないのだ。この背景には、「権力をめぐる劇を中世の王権論から解き放ち、普遍的な人類の物語として成立させようともくろんだ」（長谷部）、演出家山崎の意図を読み取ることができると思う。

さて、一同の前に呼び出され、ボリングブルックへ王位を譲るよう求められたリチャードは、「では、従兄弟ヘンリー、王冠を手にするがいい。」[15] と言って、いったんは王冠を両手でボリングブルックの方に差し出したものの、すぐさま、その両手を引っ込め、王冠を自分の頭に載せた。しかし、ついに彼は廃位を受け入れ、こう語った。

さあ、よく見るがいい、私が私でなくなるさまを。
こいつの頭から、この冠をとってさしあげよう、
こいつの心から、王権の名誉をとってさしあげよう。
おまえは自分の手で、王の冠を譲り渡すだろう、
おまえは自分の舌で、王の地位をとり消すだろう、
おまえは自分の息で、王への義務を吹き飛ばすだろう。
私は誓う、土地、財産、すべてを捨てる、
おれの持つすべての権力を、王の権力を白紙にもどす。

---

[13] "And shall the figure of God's majesty, / His captain, steward, deputy elect, / Anointed, crowned, planted many years, / Be judged by subject and inferior breath, / And he himself not present?" (4. 1. 126-30)
[14] "Not all the water in the rough rude sea / Can wash the balm from an anointed king. / The breath of worldly men cannot depose / The deputy elected by the Lord." (3. 2. 50-53)
[15] "Here, cousin, seize the crown." (4. 1. 182)

王座を失ったリチャードは祈ります、
王座を勝ち得たヘンリーを守りたまえ、
そして輝かしい日々を遅らせたまえ！[16]

上記の台詞は原作では、すべてリチャードによって一人称で語られるのだが、この公演では、2行目から6行目までは、黒コートたちが分け合って、9行目から11行目までは、黒コートのコーラスによって語られた。リチャードが「王の権力を白紙にもどす」と言うと、黒子（黒コート）が、舞台中央に跪づくリチャードの頭上から、王冠をすっと取り去るのが見られた。この直後、ノーサンバランド伯から、国家に対する罪状を読み挙げるよう言われたリチャードは、それを拒否し、臣下に裏切られた自己の境遇を嘆く。この間、吉田は一度も立ち上がることなく、床に膝をつけたまま、時には拳を振り上げ、時には拳で床を叩き、台詞の一言一言を噛み締めるように語りながら、怒りと自己憐憫を力強く表現した。「ああ、この身が雪だるまの王であればよかった、そうであれば、ボリングブルックという太陽に照らされ、溶けて流れて水しずくと消えることもできたろうに！」[17] と言った後、彼は鏡を求め、自分の顔が写った鏡を頭に叩きつけた。リチャード退場後、カーライル司教やオーマールらによるボリングブルック暗殺計画が暗示された。

5幕では、ロンドン塔に引かれてゆくリチャードを王妃が待ち受ける場面（5幕1場）に続き、オーマールらによる新王ヘンリーの暗殺計画に関する密書が、父親のヨーク公に発見され、計画が露見。ヨーク公は止めようとする夫人を振り切り、ヘンリーに通報すべく彼のもとへ急ぐ。（5幕2場）謀反の企てを知ったヘンリーは激怒するが、ヨーク公爵夫人（Duchess of York）の必死の嘆願によりオーマールを許す。（5幕3場）2001年公演では、5幕3場冒頭のボリングブルックの放蕩息子（のちのヘンリー5世）への言及は削除され、オーマールが命乞いに新王ヘンリーのもとに駆けつける場面から始まった。オーマールと前後して、ヨーク公、そしてヨーク公爵夫人が登場。長身で分厚い黒眼鏡をかけた山崎演じるヨーク公爵夫人が、右往左往しながら必死に息子の命乞いをする場面は、観客の大爆笑を引き出し、コミック・リリーフとして効果的に機能した。

一方、ポンフレット城に幽閉されたリチャードは、ボリングブルックが彼の死を望んで

---

[16] "Now, mark me how I will undo myself: / I give this heavy weight from off my head, *[Gives crown to Bolingbroke.] / And this unwieldy sceptre from my hand, [Takes up sceptre and gives it to Bolingbroke.]* / The pride of kingly sway from out my heart; / *With mine own tears I wash away my balm,* / With mine own hands I give away my crown, / With mine own tongue deny my sacred state, / With mine own breath release all duteous oaths. / All pomp and majesty I do forswear; / My manors, rents, revenues I forgo; / My acts, decrees and statues I deny. /.... 'God save King Henry', unkinged Richard says, / 'And send him many years of sunshine days!'" (4. 1. 203-21) 2001年公演ではイタリック体の部分は削除された。

[17] "O, that I were a mockery king of snow, / Standing before the sun of Bolingbroke, / To melt myself away in water-drops!" (4. 1. 260-12)

いると察したエクストン (Exon) によって暗殺されることになるのだが、山崎は 5 幕 4 場の冒頭において、ボリングブルックの心の中を黒コートのコーラスに語らせるという手法を取った。すなわち、ヨーク公爵一家退場後、舞台中央奥の暗闇に白い部屋着姿のリチャードが現れ、ボリングブルックが黙ってその悲しげな姿を凝視している間、「私にはあの生きている恐怖をとりのぞいてくれる友はいないのか」という台詞が黒コートのコーラスによって繰り返された。そして、「友はいないのか」と、ボリングブルックが二回繰り返して言った後、原作のように、エクストン（山崎が操るシェイクスピア人形）が登場し、従者に対して、「さっき王が言われたおことば、聞いたか？「私にはあの生きている恐怖をとりのぞいてくれる友はいないのか」そう言われただろう？」と言い、[18] ボリングブルックの真意を確認した。

5 幕 5 場から、牢獄をこの世に喩え瞑想するリチャードの独白は削除され、1 幕で永久追放され、ヴェニスで客死したモーブレーが、リチャードのもとに現れるという新しい場面が挿入された。モーブレーは劇の最初に登場した後は、二度と舞台に現れない人物である。しかし、山崎は、「歴史劇ではずっと生きている人物もいれば、どんどん死んでいなくなってゆく人物たちもいる。モーブレーは第一幕の去り際に、「何かが起こりますよ」と予言めいたことを言い残して去る。彼がどこでどのように死んだかについては、カーライル司教から告げられるのみ。言葉による説明だけではもったいない。だから、彼の存在を観客に印象づけるために、牢獄の場面でリチャード 2 世と会話させることにした」と述べている。(筆者との面接インタヴュー)

牢獄での短い会話の最後に、モーブレーが「私の墓はヴェニスにあります。」と言うと、リチャードは「墓？俺も死ぬのか？殺されるのか？」と尋ね、モーブレーが「それはヘンリーにお聞きください。」と言って去る。残されたリチャードが「モーブレー、出てきてくれ。私をここから出してくれ。」と叫んでいる所に、馬丁が登場。リチャードのことを今でも王様と呼び、懐かしんで訪ねて来てくれるのは身分の卑しい馬丁のみ。エクストンに催促されるように馬丁が退場した後、暗闇から聞こえる「シュー」という擬音の手渡しによって、リチャードの死が表現された。

5 幕 6 場で、小須田演じるボリングブルックは、リチャードの亡骸を運んできたエクストンを厳しく叱責する。「おまえはいったいなにをした、その死の臭いのする手で、私の頭上に、この国土に、悪口と根も葉もないうそをもたらすこと以外に？」と。[19] 彼はリチャードの死を願ったことは認めるが、おまえの行為は決して許されないと、エクストンにこう

---

[18] "Didst thou not mark the King, what words he spake: / 'Have I no friend will rid me of this living fear?' / Was it not so?" (5. 4. 1-3)

[19] "I thank thee not, for thou hast wrought / A deed of slander with thy fatal hand / Upon my head and all this famous land." (5. 6. 34-36)

言うのだ。「毒を必要とするものも毒を愛しはせぬ、私もまたおまえを愛しはせぬ。たしかに私は彼の死を望んだ、だが殺したものは憎む、愛するのは殺されたもののほうだ。」[20] これは権謀術数に長けた冷徹な為政者の言葉であると言えよう。しかし、一見、冷徹に見えるボリングブルックだが、実はリチャード殺害に対する罪の意識に苛まれているということが、この後に挿入された彼と黒コートたちの対話を通して表現された。

「おまえなど友ではない」と言い捨てるボリングブルックに、「愛されるのは殺されたもののほう」と黒コートたちが繰り返す。「殺せとは命じなかった」、「王位は奪ったのではなく、譲られたもの、しかもリチャード自ら喜んで」と、リチャードの廃位をも正当化しようとするボリングブルック。そうではなかったはずだと、リチャードの言葉を借りて指摘する黒コートたち。「リチャードは言った、自分が雪だるまの王であればよかったと、そうであれば、ボリンググルックという太陽に照らされて、溶けて、流れて、水しずくと消えることができたのに」と。すると、ボリングブルックはその事実を認めながらも、リチャードの命を奪ってしまった今、自分のことを国民はどう思うだろうかと、世論の動きを懸念し始める。これがやがて噂として世間に流布されるかもしれないからだ。彼のこの心の内を察するかのように、黒コートたちが、「あなたが本当に恐れているのは、真実の悪い知らせよりもっとたちの悪い嘘のいい知らせだ」と、プロローグでの「噂」の言葉を繰り返した。

この後、原作ではボリングブルックの語る下記の台詞が、彼と黒コートたちによって分け合って語られた。遠ざかってゆく黒コートたちに向かって、ボリングブルックは言う。「誓って言うがいま私の魂は悲しみでいっぱなのだ」、「どうか黒い喪服に身を包み哀悼の意を表していたきたい」と。それに答えて今度は黒コートが、殺されたリチャードの立場から言う。「その身が栄えんがために、この身は血の洗礼を浴びたのだ」と。そして黒コートたちは要求するのである。「あなたの罪の手からこの血を荒い清めるために、聖地遠征の十字軍に参加していただこう」と。[21] ところで、この場面の演出の意図について山崎は次のように語っている。

> ヘンリーの台詞ではなく、誰かがヘンリーに言っている台詞になっている。ヘンリーの心が思っているから、心をやっている黒コートが参加したまえと言う。ヘンリーは王になるつもりはなかった。自分の受け継ぐべきものを返してほしかっただけだ。なぜそうなったかは、うわさが広がったからとも考えられる。黒コートの位置づけは噂。

---

[20] "They love not poison that do poison need; / Nor do I thee. Though I did wish him dead, / I hate the murderer, love him murdered." (5. 6. 38-40)

[21] "Lords, I protest, my soul is full of woe / That blood should sprinkle me to make me grow. / Come, mourn with me for what I do lament / And put on sullen black incontinent. / I'll make a voyage to the Holy Land / To wash this blood off from my guilty hand." (5. 6. 45-50)

ヘンリーの野心だけでなく、周りからいつの間にかそうさせられてしまった。

リチャードの葬列が厳粛に通り過ぎた後、舞台中央に黒コート（シェイクスピア人形）が登場し、エピローグを語った。「さあ、王たちの死の悲しい悲しい物語をしようではないか、やめさせられた王、戦争で虐殺された王、自分がやめさせたものの亡霊にとりつかれた王、みんな殺されたのだ、王よ、さらば！」[22] そして、黒コートたちによる「シュッ」というこの世を離れる王たちの魂の擬音。幕切れには、群集（黒コートたち）の中のリチャードと、ヘンリー・ボリングブルックが一瞬顔を見合わせる場面が挿入された。王である人間として、さまざまな欠点をさらけ出しつつ、最後には悲劇の主人公として観客の共感を獲得したリチャードと、王位簒奪の代償の大きさを思い知らされるヘンリー・ボリングブルック。やめさせられ、殺されたリチャード 2 世の物語はこうして幕を閉じた。

---

22 "*For God's sake let us sit upon the ground* / And tell sad stories of the death of kings－ / How some have been deposed, some slain in war, / Some haunted by the ghosts they have deposed, / Some poisoned by their wives, *some sleeping killed*－/ All murdered. / *For within the hollow crown / That rounds the mortal temples of a king / Keeps Death his court; and there the antic sits, /.... Bores through his castle wall, and* farewell, king!" (3. 2. 155-71) 2001 年公演ではイタリック体の部分は削除された。

引用文献

Forker, Charles R., ed. *King Richard II*. The Arden Shakespeare. London: Thomson Learning, 2002.

長谷部浩『グローブ座カンパニー「リチャード二世」:「人間」描き出す吉田鋼太郎』日本経済新聞（夕刊)、2011年７月26日。

小田島雄志訳『リチャード二世』東京・白水社、1983。

高橋康也監修・佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』別巻2、東京・日本図書センター、1998。

Weis, René, ed. *Henry IV, Part 2*. The Oxford Shakespeare. Oxford: Clarendon Press, 1998.

山崎清介、面接インタヴュー、2001年8月21日。

山崎清介演出『グローブ座カンパニー・リチャード二世』プログラム、倉敷市芸文館ホール、2001年８月21日。

山崎清介演出『グローブ座カンパニー・リチャード二世』ＮＨＫ BS2、2002年8月12日放送。

山崎清介脚本・演出『子供のためのシェイクスピアカンパニー・尺には尺を』プログラム、北九州芸術劇場・中劇場、2005年８月24日。

2011年１月31日受理

Abstract

Staging Shakespeare for Children:
Seisuke Yamasaki's 2001 Production *of King Richard II*

ETSUKO FUKAHORI

This paper offers a descriptive and analytical account of Seisuke Yamasaki's 2001 production of *King Richard II* that focuses on textual editing and staging choices. Particular attention is paid to the ways in which the play was recreated for a young audience. The account of this production is mainly based on the author's memory with an insight into Yamasaki's dramaturgy given by her personal interview with him. In addition, a video recording of a performance of the production was used to integrate the author's recollections of some scenes.

Yamasaki made many alterations to the play. For example, he rearranged the order of the scenes of the first act so as to make the flow of events clearer. He also made a considerable number of line cuts and omission of characters to stress the actual progress of events in the play, thereby shortening the playing time. Finally, he introduced modern humor, idioms, and new episodes designed to appeal to family audiences. This paper argues that Yamasaki's alterations were invariably fitting and did not fundamentally distort the original.

An articulate and vibrant delivery by the actors was another forte of the production. The result was strikingly Elizabethan because it depended almost exclusively on actors' bodies and voices for the dramatic effect. The production conveyed so much of the play to its young audiences that it must be considered an important chapter in the stage history of Shakespeare's history plays in Japan.